

西郷隆盛—金子美智子—乃木將軍—中村洲心  
大物の浦—青木旭洲—項羽—吉田央舟—坂  
崎出羽守—山下晴楓—講評—山岡知博先生。

琵琶と詩吟演奏会

十月十一日(日)午前十一時半仙台市日立フ  
ァミリーセンターホール、主催錦心流一水会仙  
台支部、後援市教育委員会ほか。人間親鸞—  
阿部万二—後援(上)—熊谷沼水—白虎隊—阿部  
山水—羽衣—(奥伝披露)相原磯水—常陸丸  
—赤間磯水—西郷隆盛—三好磯水—石童丸—  
加藤蓄水—噫中村大尉—伊東睦水—橋大隊長  
—小形錦舟—義士の本懐—野本旭栄—本能寺  
—旅河高水—父乃木將軍—(総伝披露)長谷  
淳水—雪中常盤—会主吉田江水—(以下来賓)  
屋島の蒼—東京座間松水—村上喜剣—秋田屋  
野濤水—舟弁慶—東京中谷蘆水。外に詩吟五  
題、民謡一題。

筑前琵琶旭会全国大会

十月二十四、五両日(日)午前十時十五分東  
京千代田区大手町農協ホール、主催日本旭会  
司会東都旭会(有料)。第一日三十八曲、第  
二日三十七曲各競演。二十六日は総会及び懇  
親会。(次号詳報)

琵琶と詩吟詩舞の会

十月二十五日(日)午前十一時西宮市立夙川公  
民館松下ホール、主催西宮市・市教育委員会、  
主催西宮琵琶詩吟同好会、後援一水会大阪、  
神戸両支部。作詞家故松野紫雲氏の追悼を兼  
ね故人の作詞を主として演奏。演奏は会員の  
琵琶十四、詩吟詩舞二十五題の外大阪小川吟  
水、同中山鳳水、京都平井春嶺、彦根林田旭  
城の四氏来賓出演、会主三浦蓮水女史は「楊  
貴妃」を演奏。(次号詳報)

阿部秀子琵琶演奏会

十月二十五日(日)午前十一時名古屋中小企業  
福祉会館、後援日本芸術協会ほか。松浦秋翠  
長谷川秋楓、山本秋香三氏の昇伝披露を兼ね  
た催しで会員十九名の外京都、名古屋、福井  
東京、横須賀からの十二氏協賛出演。会主阿  
部秋子女史は「西郷隆盛」、会長前田秋声氏  
は「小栗栖」演奏。(次号詳報)

ラヂオ琵琶放送

十月八日(日)午後三時十分NHK・FM。荒  
井姿水女史「屋島のほまれ」放送。

予告

- ：京都琵琶協会十一月例会 十一月一日(日)  
午後二時本部平井会長宅。
- ：赤心流琵琶大会 十一月三日(日)午前  
十時静岡浅間神社赤鳥井前プリンス会館魚  
磯座敷(別項参照)。
- ：水藤五朗琵琶演奏会 十一月四日(日)夕六  
時半東京日本橋第一証券ホール(別項参照)。
- ：滋賀県安土町浄嚴院秋の大祭に琵琶献奏  
十一月三、四両日。大阪琵琶同好会協賛。
- ：錦心流一水会全国大会 十一月七日(日)午  
前十時東京銀座ガスホール。主催一水会本  
部。
- ：各流派琵琶合同演奏会 十一月八日(日)正  
午京都東山松原上ル安井金比羅宮会館、主  
催京都琵琶協会。会員等十六名の外大阪中  
山鳳水、神戸滝沢花水両女史協賛出演。

あとがき

晩秋十一月、満目紅葉で紅一面の  
美観を呈している。琵琶界も九月半  
ばから十一月初旬にかけて演奏会な  
ど盛んに催されたが、やがて一段落  
となり、天高く澄み切った名月のもと心頭  
を滅却して好きな一曲を奏でる気分が愉えよ  
うもない味わいで、よくぞ琵琶を習っておい  
たと若い頃のことを想い出す。二人か三人で  
公開演奏会の場合、長い歌曲は前号の本欄で  
続けて全曲を分奏しては、と書いたところ、  
二、三の読者から「大賛成」との反響があつた  
●その中の一人の方は熱心な琵琶ファンで演  
奏会と聞けばどこへでも飛んで行く人だが、  
歌詞の「中抜き」は作詞者に失礼で琵琶を  
冒瀆するものだと言いついていられた。古い琵琶  
歌は明治大正時代に作詞されたものが多く、  
その当時の世相は悠長で今のように気忙しい  
なかつたので奏者も聴者もしんみりと全曲の  
妙味に浸っていた。最近は一曲十五分と大体  
相場がきまつているので歌詞の「中抜き」も  
やむを得ない結果となつていゝが、琵琶歌  
は演歌や歌謡曲などの流行歌とは根本的に趣  
を異にし一種の「語りもの」で、演奏を通じて  
その時の状態や作者の心境をしのび懐かし  
むのが主眼であるから、歌中の美辞麗句など  
を省略することなく全曲を二、三人で続けて  
分奏すれば聴者も堪能することと思ふ。●本号  
は各地演奏会などの報道記事が多くて貴重な  
一、二の御寄稿が掲載不可能となり執筆者に  
申し訳ない次第、不悪御寛容を頂きたい。

昭和五十六年十一月一日発行(非売品)  
編集者 植村 實 水  
発行所 吹田市山田東一丁目三番地B六二四  
千565 電話〇六(八七五)〇三二六番

琵琶  
機関紙

京

絃

第三二九号 京 絃 社

おんなの都 (三)

小督の局 (3)

秋の嵯峨野は虫の音色にみち、月はいよいよ  
よびえ渡って、行けど果てない野路がつづい  
ている。

源仲国は洩れいずる家々の灯を見つづけるた  
びに、もしやと思つて声をかけて尋ね廻つて  
みたけれど、遂に小督を見つけて出せなかつた。  
もう諦めよう。然し竜顔に涙さえ浮かべら  
れた上皇を思うと、このまま帰れない。そこ  
で龜山の麓を廻つて大堰川の瀬々らぎ近くに  
やつて来た。すると月明にほの見える林の間  
から、微かに琴の音が響いて来た。

峰の嵐か松風か、訪ぬる人の琴の音か、  
覚束なくは思へども、駒を早めて行くほど  
に、片折戸したる内に、琴をぞ弾きすま  
されたる。控えてこれを聞きければ、すこし  
も紛うべくもなき小督殿の爪音なり。樂は  
何ぞと聞きければ、夫を想うて恋ふとよむ  
想夫恋といふ楽なり。

平家物語の原文は、喜び勇んだ仲国が、君  
を恋う小督の胸中を察しつつ自らも横笛を取  
り出して小督の琴に合わせたと記している。  
小督は、お迎えに参上したという仲国の言  
葉に恐れを抱いた。しかし、やんごとなき高  
倉院のお文を頂いてはご殿へ帰らざるを得な  
い、と云つて御殿へ戻つたならば、清盛は自  
分を惜んで殺そうとするに違いないし、院に  
も御迷惑がかかるに違いないと考へ、しばら  
く考えさせて下さいと態度を保留したので、  
仲国は従者を残して急いで院の御所へ向つた。  
夜も明けそめる頃で、御寝になつていると  
思つていた高倉院は、まだ寝もやらず仲国を  
待ちわびておられたので、事の次第を言上し  
て小督の文を院に渡した。  
夫を想うて恋うるといふ想夫恋を弾じてい  
たと聞いては院も我慢がならず、清盛の怒り  
も物かわと堅い決心の上、再度仲国に命じて  
小督を召し連れ参れとの事に、小督も否めず



郡 恵 一

仲国の案内で院の御殿に上つた。高倉院は非  
常に喜び、連日連夜小督の部屋へ通いつめら  
れ、やがて小督は姫宮を出産した。  
後に坊門の女院と呼ばれた姫宮の生誕があ  
つて間もなく、これが清盛に知れたので清盛  
は許さず、直ちに一隊の荒武者を院の御殿に  
派遣して小督を取り押さえ、最初は亡き者に  
せんとしたが、世間の風評をばかかって、髪  
をおろして尼にしてしまった。

新尼となつた小督はこの時二十三歳、場所  
は京都東山麓清閑寺であつたという。嘆き悲  
しまれた高倉院は、自分が死んだらその亡骸  
(なきがら)を、必ず清閑寺に葬むるよう  
に遺言して、二十一歳のはかない生命を、燃  
えつきた蠟燭の火が消える如くに果てられた。  
これを知つた小督は、元久二年(一一〇五)  
四十四歳で歿するまで、片時も上皇の清閑寺  
陵を離れることなく、菩提を弔つたといふ。  
現在清閑寺陵の傍らに、ひっそりと寄り添  
うように立っているさやかな塔があつて、  
これを小督の塔と云つてゐる。そして更に、  
嵐山・渡月橋の上手、大堰川左側の片隅に小  
督の塚がある(完)。(次回から「常盤御前」)。

(附言) 小督の局は桜町中納言重範の息女  
で、高倉上皇崩御の後、大堰川に身を投  
じて殉死したとの説があり、また清盛が  
小督の美貌に心動き、意に従わしめんと  
したが成らず、ために殺してしまつたと  
いふ説もある。

### 菅原道真(上)

ばくすい



「いろは歌」から源氏物語へと、一途に発展していった国文学の全盛時代、その中心に当るのは延喜の代で、この時代に古今集も撰ばれ延喜式も作られた。ところがこの延喜の代に一つの不幸な事が起った。菅原道真の非常な抜擢が一瞬にして百八十度転回し、九州へ流罪という事件である。

菅原氏はもと士師氏、野見宿禰から出ている。桓武天皇の代に、姓を菅原と改めるのを許されたのは古人、その子が清公で、遣唐使として最澄・空海らと共に唐の国に渡り、帰朝して文章博士となり学問を以て奉公した。清公の子が是善で同じく文章博士となり大学頭に任ぜられた。是善の子が即ち道真である。道真は早くから学問に志し、十一歳で初めて詩を作った。

月の耀(ひかり)は晴れたる雪の如く  
梅の花は照れる星に似たり  
憐(あわれ)むべし金鏡を転じて  
庭上に玉房簪(かお)ることを  
次に十四歳の時に作った詩は、長文なので、あと半分を掲げる。

水は水面を封じて聞くに浪無く  
雪は林頭に転じて見るに花有り  
恨むべし未だ知らず学業を勤むることを  
書齋窓下、年華を過ごす

その翌年十五歳で元服、その時母堂の詠んだ歌「久方の月の桂も折るばかり、冢の風をも吹かせてしがな」月桂冠を得て、学界の第一人者と謳われる程に、学問の冢として名をあげて欲しい、という意味である。  
道真は少内記、民部少輔、式部少輔と段々出世して文章博士となり、学界に於いて推しも推されぬ地位を占めたが、同時に多くの秀才が門下に集まり、壯觀を呈し盛況を極めるに至って、周囲から嫉まれ猜まれるようになって来た。

やがて仁名二年、讃岐守に任ぜられて四年間讃岐(今の香川県)の民政を掌り、任期終つて京に帰るや蔵人頭(くらんどのかみ)となり式部少輔に任ぜられ、躍進して参議、式部大輔を兼ね、朝廷の中心に立つこととなった。それは宇多天皇の信任が厚かったからであるが、更に進んで中納言となつて民部卿を兼ね、長女が宮中に入って女御となり、道真は右大臣に任ぜられた。

道真としては空前の出世で、しかも宮中から長女を召されたとなると四冊の嫉みは頂点に達した。藤原氏は良房以来太政大臣、摂政、関白となり、他の人々とは断然かけ離れた權威を誇っていたのに、いま醍醐天皇の代になつて藤原時平は左大臣、菅原道真は右大臣、

兩人左右に並んで時平は二十九歳、道真は五十五歳、学問経験共道真は輝かしい存在である上に、先帝宇多上皇の御信任は道真に対して絶対的であったとすれば、藤原氏やこれを取巻く周囲が謀略を以て、道真を除かんとする運動の起つたのは是非もない事であった。

### 四絃漫筆

島津天嶺



#### (四) 琵琶歌と漢詩

日本琵琶協奏会誌第二〇号(昭和五十六年九月発行)に八束一峰先生が、わが国の詩吟(吟詠)の歴史について書かれているが、その中で藩政時代の薩摩琵琶歌には漢詩はなく、琵琶歌に漢詩が取り入れられたのは福本日南の「台湾入」からではないかと考証されているが、多分その通りであろう。古い琵琶歌の中で漢詩らしいものを探すと「形見の桜三段」に「朝に紅顔ありて世路に誇れども、夕には白骨となりて郊原に朽ちぬ」という句があるが、これは漢詩というよりは釈の偈のようなもの、先年亡くなられた脇岡先生はこれを詩吟調で歌っておられるが、恐らく琵琶詩吟の流行しない時代には琵琶歌調で歌われていたものと私は思っている。

さて明治に入ってから琵琶歌に和歌の外に漢詩が取り入れられているが、これも例えば前記の「台湾入」の場合では漢詩のあとに「と宮の歌い給いし如く」と続けて、全く歌の一部として消化されている。その他今よく歌われている「本能寺」「川中島」「白虎隊」等何れも、少し表現が難しいけれども、歌を構成するのに必要な要素として漢詩を使用しているのである。これは藩政時代の琵琶歌に和歌を取り入れられている一例で、前記「形見の桜三段」に「昨日まで誰が手枕に乱れけん、蓬が本にかかる黒髪」と「つらねおかれ云々」と続くのと全く同じ用法なのである。

八束先生によるとこのように琵琶歌中で歌われた漢詩が琵琶詩吟として聴衆の人気を呼んだようで、琵琶歌に漢詩が「つきもの」のようになったのではあるまいか。

もともと原作には入っていない「城山」には「孤軍奮闘云々」の漢詩を入れるようになったようであるが、これは後から付け加えたものであるから歌の中に融けこんでいない。琵琶歌と同じ事件を詠じた漢詩を同じような琵琶歌の中に無理に挿入したからである。

明治四十五年に発表された池辺義象先生の名作「彰義隊」には最初から「戊申五月」に初まる律詩が入っているが、この詩は琵琶歌と全く同じ内容の独立したもので琵琶歌の構成には必ずしも必要ではない。意地悪くいえば同じ事件を二回も、歌と詩で表現している

のである。これはやはり琵琶詩吟が一般大衆に受けたためであろう。

このことについて私は日本琵琶協奏会誌に「以上のように重複するので演奏時間の関係で歌詞を省略するならば漢詩の方を省略すべきではないか」という趣旨のことを述べたことがあるが、これは今でも正しいことと思っている。

しかし最近琵琶詩吟の短かい歌をつくる場合にこの漢詩を利用することが、非常に有効なことに気がついた。

例えば「城山」であれば「孤軍奮闘(中略)一壘壁の間」と出て、このあと「明治十年の秋の末」とつづけ「面を向けん方ぞなき」で琵琶歌を終り「吾が劔は既に折れ」と詩に戻り、最後は「折しもあれや云々」と琵琶歌で結ぶという手法(後出)である。

彰義隊の場合には詩も律と長いので詩と歌とを色々組み合わせると演奏時間も短かくして一応筋の通った詩形とすることが出来る。このように既存の漢詩と既存の琵琶歌とを組み合わせて比較的短かい曲、しかし事件の内容はある程度表わしている曲がつくれるようである。

新しい感覚でつくられる新しい琵琶詩吟も必要であるが、既に人口に膾炙(かいしゃ)している琵琶歌と漢詩とを結合連鎖することによってできる短かい歌曲を考案することも必要なことであると私は信じている。最後に前述の「城山」の琵琶歌をご紹介します。

ておく。

#### 城山

孤軍奮闘破囲還 一百里程壘壁間  
明治十年の秋の末 諸手の戦さ打ち破れ  
討ちつ討たれつやがて散る 霜の紅葉の  
紅の 血汐に染めど返り見ぬ 薩摩猛夫  
の雄叫びに 打散る玉は板屋打つ 霰た  
ばしる如くにて 面を向けん方ぞなき。  
吾劔既折吾馬倒 秋風埋骨故郷山  
折しもあれや吹き下す 城山松の夕嵐。」

#### 第十四回

### 赤心流琵琶大会

日時 十一月三日(休)午前十時  
会場 静岡浅間神社赤鳥居前プリンス  
会館魚磯座敷  
主催 吟詠・琵琶 赤心流

赤心会員による吟詠、琵琶数番のほか東  
京若宮旭登一 大物の浦 同中谷襄水一 西  
郷隆盛 同石井桑水一 唐人お吉 静岡小  
川野水一 重衡 同岡尾鶴城一 濤陽江(上)  
浜松小野鶴彦一 蒙古来 京都田中款水一  
舟弁慶 同平井春嶺一 本能寺 同梅原旭  
壽一 由比ヶ浜風 同植村真水一 真如の月  
以上協賛出演(順不同)。会主赤心流鶴  
翁は濤陽江(下)を演奏。

### 奥州平泉

#### 藤原氏三代の文化と 栄華を伝える古都

辻 旭 城



奥東北にも春がめぐってきた。この地方での遅い春を待ちかねていたかのよう、あちこちの山々には緑が萌えて、里には花が咲き競ってきた。筆者は十余年前、平泉に藤原氏の栄華の夢を求めて訪ねてみた。

平泉は中尊寺と毛越寺に代表される。藤原三代に続く文化を今に伝えていく古都である。中尊寺から毛越寺までは歩いてみて三十分ほど、地の利に恵まれている。

東北本線平泉駅に降りてあたりを眺めると、九百十余年前の藤原期全盛の頃は、中尊寺と毛越寺は寺域が広がっていた。最近でも平泉駅附近の田畑の造成をしている時に、毛越寺の遺構などが発見されることがあり、それを考えると如何に大きかったかを推測することが出来ます。」と、訪ねた町役場の吏員が話してくれた。

中尊寺を訪れるべく北に向って歩くと、高館義経堂があった。月見坂を登って左に弁慶堂を見ながら少し行くと、等身大の弁慶の像が仁王立ちしている様子は、見る者を圧倒する

真迫力が感じられる。

参道は杉木立に囲まれた暗い道、処々に木立の切れ目が物見台となり衣川の悲劇を語る。また北上川の緩やかな流れが霞の中に浮かぶ。

文治三年(一一八七)源義経と兄頼朝が不和となり、これを悪用した梶原景時は二人の離間を画策したので、義経主従十余人は山伏姿に身をやつし、平泉を目指して落ちのびたが、途中安宅の関で弁慶の機智と、関守富樫の仁情によって、弁慶を泣かしたものは衆知の通りである。

こうして虎口を逃れた主従は、道中苦難を重ねつつ藤原秀衡のもとに走ったが、秀衡の死後平泉は義経らには悲劇の舞台となった。

文治五年(一一八九)四月三十日の朝まだき、教日前鎌倉幕府の頼朝から義経追討の命を受けた藤原泰衡は、突如自ら大軍を率いて義経を襲撃した。義経をはじめ側近の片岡八郎、伊勢三郎、常陸坊海尊、鈴木三郎、その弟亀井六郎、鷲尾三郎、備前平四郎、増尾十郎らは、高館で奮戦したあと何れも斬死、弁慶は衣川で全身針鼠の如く敵の矢を浴び、壮烈な立往生をとげた。

以上が世に伝えられる『悲劇衣川物語』の大略であるが、一説には義経、弁慶らは戦火の平泉から通れて蝦夷地に渡ったと云われる。字芸志林は「蝦夷を征服シ山丹ヨリ進ミテ韃靼ニ入ル(中略)蝦夷地ニ弁慶岬アリ、韃靼地方ノ門戸ニ必ズ弁慶武装ノ図ヲ描キ貼ルハソノ証ナリ……」とある。

### 昭和五十六年度文化庁芸術祭参加公演 第二回水藤五朗 琵琶演奏会

とき 十一月四日(水)六時半開演  
ところ 日本橋三越前第一証券ホール  
入場料 二、〇〇〇円  
主催 錦琵琶本部

一、勸進帳(掛合い。問答入り)

山下晴風 岩崎竜風 田中光水  
森中志水 (絃) 水藤五朗(鼓)  
藤舎華風 (笛) 望月太八

一、恵林寺炎上(独奏)

水藤五朗 (尺八) 川村泰山

一、羽衣(合奏)

水藤五朗 木原綾子 水藤俊子  
藤巻旭彰 (琴) 関口歌悦 (尺八)  
川村泰山 (鼓) 藤舎華風

〒176 東京都練馬区旭町

三一二二一四  
錦琵琶本部

水藤五朗

電話(930)四四九八番

寛永二十年(一六四三)の頃、越前新保の人が難船して韃靼に漂着し、清の皇帝に連れられて北京に入り、一年余の後、朝鮮を経て日本に送り返されてくるその人が、奴児千部(スルカンブ)吉林の人家の門に弁慶の神像がどの冢にも貼られているのを確かに見たと云っている。

東北各地には義経主従にちなむ伝承や遺蹟が多い。それらを繋いでゆくと、一つの軌跡が浮かんでくる。宮古周辺には義経関係の事蹟も多い。義経の甲冑を埋めた判官稲荷、一行が暫く籠っていたという横山八幡、長沢の判官堂、津軽石の判官館と判官神社や、八木沢の判官洞等々。

安宅の関守富樫左衛門は東北の渡が出身地だが、渡とは鉾石を筏で運搬する部落で、当時は鉾山の権利が修験者の支配下にあった。こうしたことから平泉に義経らが落ちのびた後も、平泉から絶えず修験者に扮して、安宅の関の富樫を訪ね金品を寄贈させている。

文治三年十二月藤原秀衡歿。高館で義経が自害するのはそれから約一年半後のことで、その間泰衡は父秀衡の意志を受け継いで仲々腰をあげなかったが、鎌倉幕府からの三回目の号令で遂に五百余騎を以て高館を攻めた。義経戦死と見せかけて私に逃がしたのでないのだろうか、とも考えられる。



### 琵琶歌中の 詩吟・和歌朗詠考(二)

編集部

#### (琵琶歌一) 広瀬中佐

編 集 部

一 死報国期七生  
二 任閉塞宿望成 河野 天 嶺  
三 索杉野終不得 飛弾掠体水有声  
四 縦中僅留一片肉 満身精華散如桜  
君不見軍神広瀬中佐烈 偉績達天輝八敏

ふたたびへいそくににんじて しゆくばうなる、いっしほうこく ひちせいをきす、みたびすぎのをもとめて ついにえず、ひだんたいをかすめて みづにこえあり、ていちゅうわづかにとどむ いっぺんのにく、まんしんのせいかさんじてさくらのごとし、きみみずや ぐんしんひろせちゅうさのれつ、いせきてんにたつして はっこうにかがやく。

#### (琵琶歌一) 軍神乃木

乃木三典歌 作 間 鴻 東

阿兄勝典勇拔群 阿弟保典武兼文  
乃父將軍名希典 一家三典悉從軍  
將軍死日告遺志 武夫捨命尋常事  
一人戰死勿出棺 留一旦待兩個至



果然南山激戰時 冒險奮闘失長兎  
敵彈無情旅順役 又為乃木折一枝  
接報將軍色不動 將軍不痛聞者痛  
守棺夫人感奈何 夫人不慟國民慟  
君不見嗚呼忠臣三楠公 殉難報國關門空  
壯烈古今堪相比 三典獻身取遼東

あけいかつすけ ぶぶんをかぬ、だいふしようぐん なはきてん いっかさんてん  
ことごとくぐんにしたがう、しようぐんはつするのひ いしをつぐ、ぶふめいをすつるは じんじょうのこと、いちにんせんしするも かんをいだすなかれ、いつをとどめてまて りょうこのいたるを、かせんなんざん げきせんのとき、ぼうけんふんとう ちようじをうしなう、てきだんむじょう りよじゆんのえき、またのぎのために いっしをおる、ほうにせつして しようぐんいろごかず、しようぐんいたまず きくものいたむ、かんにまもる ふじんのかんやいかん、ふじんなげかず こくみんなげく、きみみずや ああちゅうしん さんなんこう、じゆんなんほうこく こうもんむなし、そうれつここん あいひするにたえたり、さんてんみをけんじて りょうとうをとる。

### 筑前琵琶で再デビュー 上原まり(柴田旭艶)



かつて「ベルサイユのばら」のマリー・アントワネット役などで、宝塚歌劇団の娘役トップスターだった上原まり。四月に退団したばかりだが、今度は筑前琵琶を手にして芸能界に再デビューする。神戸在住の筑前琵琶旭会総師範、三代目柴田旭堂の一人娘で、小さい時分から母親に仕込まれ、将来は家を継ぐという本格派。柴田旭艶を名乗る。まづ、二十六日の東京日本橋三越名人会で、古曲「大物の浦」を独奏する。続いて十月十八日には東京サンプラザホールで、都倉俊一グランドオーケストラと上原の筑前琵琶との合同演奏会がある。

宝塚歌劇のデビューが四十三年、四十六年に主役に抜きさされ、五十年はあの「ベル・ばら」。安奈淳、榛名由梨など男役トップスターの相手を務めた。五十四年には声楽専科へ。宝塚では入団後七年目が、続けるか退団するかか境目といわれている。「ええ、私の場合はそのころ大役が次々と決まって...」。専科になった時は、すでに近く退団のつもりだった。「娘役はやはり、はなのあるうちにやめたいと思ってました。私、恵まれていて、

やりたい役はだいたい出来たし」と、晴ればれとした表情だ。  
男性的な薩摩琵琶に比べ、細やかな音色の女性的なのが筑前琵琶という。宝塚時代に演奏した事はあるが、独奏は今度の三越名人会が初めて。歌と踊りと芝居のうちでは、だんぜん「芝居が好き」という。(九月二十二日朝日新聞夕刊所載「原文のまま。写真省略」)

### 水藤五朗氏



東京大手町産経学園では、十月第二、第四火曜日午前十時から十二時まで「平家物語」その背景と伝承」の講習会を開いた。講師は早稲田大学講師松島米一、錦琵琶宗家水藤五朗氏。

松原先生「史学家的立場から」(省略)。  
水藤先生「もともと『平家物語』は琵琶法師によって語られたもの、その原点に帰って『平家物語』を平家琵琶で聴くことを中心に、今日まで、伝統芸能や文字にどのように表現されてきたかを、実演やレコード鑑賞をまじえながら探究してゆく」との表題のもとに開講された。(有料)

なお水藤氏は九月十九日(出夕六時東京上野本牧亭に於ける「民族芸能を守る会九月例会

に落語、講談など当代一流の芸能人に伍して琵琶「敦盛」の一曲を演奏し琵琶楽の真髄を一般に認識せしめた。

### 夏季納涼琵琶大会

八月三十日(即正午奈良保養センター、主催大阪琵琶同好会。君が代、出口、榎本、新曲、爾靈山、西尾、吉野懐古、米原旭智、青葉の笛、馬都、赤垣源蔵、米田、扇の的、矢野旭信、本能寺、辻旭城、大楠公、作花旭友、竜の口、小林旭、井伊大老、西村旭瑞、小栗栖、野々村旭川、姫百合の塔、石橋旭、花の白虎隊、東旭子、衣川、奥村旭美、川中島、田中敷水、岩壁の母、天津八千代。外に詩吟、剣舞、日舞、扇舞等十題。

### 日本芸術琵琶普及会九月例会

九月十三日(即屋東京文京区大塚の貸席京屋で開催。異国の丘、杉山富士代、桜井の駅、今井、紅葉狩、鈴木好水、末藤西行、丸田、五條橋、内田隆章、詩吟二題、奈佐喜泉、白虎隊、日比、田村邸、佐藤旭尚、竜の口、日比二水、山科の別れ、坂入俊風、詩吟、田中吟翠、竜の口、青木早水、舟井慶、金尾岳丈、詩吟、伴旭友、関ヶ原、金森弾、西行、高田栄水、鉢の木、長谷川錦舟、批評、若宮

旭登。来賓橋本草水、中谷襄水、杉山旗水三氏。盛会裡に散会した。

### 京都琵琶協会九月例会

九月二十三日(休)午後二時本部平井会長宅。(出席者)馬場鴨水、林旭萌、西川磯水、楊嶽水、田中敷水、梅原旭濤、矢吹旭美津、山岡旭清、安住旭康、岸本港水、桜井旭爾、水内煥水、平井春嶺、植村真水以上正会員の外高橋正雄、福島やよい両氏。(研修演奏)雪中常盤、水内、湖水乗切、岸本、禪師と正宗、桜井、終戦回顧、西川、小栗栖、梅原、大森、七、田中、文天祥、平井。(協議)十一月八日秋の演奏会開催について①出演者と曲目、②同出演順抽籤、③来賓として一水会大阪、神戸両支部から各一名ゲスト出演交渉。以上を終り夕刻小宴七時和やかに散会。

### 筑前琵琶旭堂会定期演奏会

九月二十三日(休)午前十一時神戸中央労働センター。主催柴田旭堂会、後援柴田旭堂後援会。舞曲二番。汐風乙女、旭堂、旭寿、旭楓、旭晶、旭修、藤の梅、大垣旭海、山吹の夢、川村旭芳、小栗栖、野口旭碩、常陸丸、巽旭悦、絃旭堂、お蝶夫人、川村旭篤、小督、松尾旭苑、石重丸、宮村旭当、絃旭堂、若き敦盛、美喜旭悠、加茂の宵月、山口旭城、五條橋、川村旭修、五絃段、高音部旭楓、旭苑、旭悠、旭篤、旭芳、低音部旭晶、旭海、旭嶺、旭碩、旭修、二〇三高地、青木旭昶、絃旭堂

▼舞扇鶴ヶ岡、大敷旭寿、由比ヶ浜、福井旭範、絃旭堂、伽羅の兜、大敷旭晶、松の廊下、高千穂旭楓、衣川、会主柴田旭堂。外に詩吟二題。

### 遠参琵琶演奏会

九月二十三日(休)午前十時半豊橋市石山荘、一水会豊橋支部、浜松鶴絃会共催。(浜松)木枯、川口暁江、清陽江、松木輝苑、千手の前、竹原輝祥、菅公、大石鶴伶、実朝公、青島鶴瑛、小松の操、染谷鶴泉、桶狭間、伊藤鶴麗、寂光院、三上鶴浄、小督、山之内兼光、蒙古来、小野鶴彦、(豊橋)月下の陣、鈴木、常盤御前、洲洲、井伊大老、小林訴秀、筑摩川、小川清水、桶狭間、齊藤梅水、七卿落、山本宝水、野田の笛、小林典水、舟弁慶、石黒石水、城山、吉見輝水、壇の浦、菅沼穠水、大高源吾、神藤敷水、湊川、田中祈水、志水旭城、水谷浩水。

### 錦心流琵琶演奏会

九月二十七日(即)午前十一時半鯖江市民会館、主催一水会福井支部、後援県文化協議会ほか。白虎隊、小柳景城、城山、河合港順、霧の川、中島、玉木港邊、本能寺、内田景月、重衡、吉野景湖、乃木将軍、野村鱒水、川中島、上田雄水、羅生門、(奥伝披露)小竹絃水、紅葉狩、星山溪水、湖水乗切、岸本港水、西郷隆盛、細田辰水、姫百合の塔、戸田頌水、良寛、田中愛水、石重丸、水谷充水、巖流島

一(総伝披露)会主内田景水、新撰組(同)西川磯水(以下来賓)小栗栖、奈良尾山好水、敦盛、京都木下皇水、須磨の浦風、名古屋阿部秀子、木村重成、豊橋田中祈水、粟津ヶ原、名古屋水谷充水、茨木、東京花俣圭水。

### 第十八回琵琶楽コンクール

九月二十七日(即)午前十一時東京銀座ガスホール、主催日本琵琶楽協会、後援文化庁ほか。演奏者三十一名で審査の結果一位佐藤智水、二位田原順子、田中光水、三位山下旭瑞、森中志水、斉藤幹郎の各氏が栄冠を勝ち得た。尚採点審査中に花吹雪、荒井姿水、西郷隆盛、山下晴楓両氏の演奏があった。

### 竹下翠風演奏会

十月三日(出夕六時東京町田市民ホール、後援みどり琵琶本部。山吹の里、渡辺佳代子、絃堤江静、白虎隊、浅香秋芳、絃翠風、楠公、吾妻江雪、高田の馬場、吾妻江風、茨木、会主竹下翠風、青山播磨、杉山旗水。外に詩吟九題。

### 筑前琵琶橋会全国大会

十月四日(即)午前十時広島市中区新聞社講堂。尚前日の三日は総会及び懇親会。(次号詳報) 定例研究会 十月十日(即)午後一時東京新宿州鳳会館、主催日本琵琶楽協会(有料)。城山、斉藤満喜